

# 小字麻姑仙壇記

八世紀  
(唐時代)

魏晋唐小楷⑧

木  
鷄

木雞室  
伊藤 滋

図版③ (小字麻姑仙壇記の選字)



図版④ (大字本と小字本の文字の大きさ比較)



盛唐時代の顔真卿は、書道史上で重要な位置を占めている。独特の顔体と称される重厚で、太く、力強い楷書体は有名である。顔氏家廟碑を始めとして多くの碑文が残されている。「麻姑仙壇記」は、女仙人・麻姑の事績を顔真卿が晩年の六十三才の年に書いたとされる。大字と中字、小字の三種が伝えられている。今回紹介したのは、僅か六、七ミリの大きさの小字本であるが、大字本の持つ独特な重厚な趣を再現している。小字本は数種のものが伝えられているが、前回と同じく明の文徵明の刻した停雲館法帖の原刻本から抜き出した。魏晋唐小楷①「薦季直表」から今まで八種を紹介してきましたが、今号で「魏晋唐小楷」は終了します。次号からは、漢時代から唐時代までの歴代の「墓誌銘」の書法の優れたものを数回にわたり紹介します。次号は漢時代の「馬義墓誌」です。

この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りいただければ幸いです。

伊藤 滋  
メールアドレス  
mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

図版② 小字麻姑仙壇記（停雲館法帖本）全体



図版① 『小字麻姑仙壇記』図版（部分）



原寸大

# 書道芸術院

## 平成の群像 (2010)



「腰」

小浜大明



論語の中に、子曰吾十有五而志于學。三十而立。四十而不惑。…となるが、書の道は、六十をすぎた今も不惑の歳とはならない。今だに自分の書が確立できずにいる。しかし、その事は反面、新しい書を見出す為には必要なのかもしれない。六十而耳順。とあるが、正に最近は書家や評論家の書論を多く読み、そこから何か新しいものを発見しようと考る様になった。書に対する考え方や見方が固執していた若い頃とは変ってきてている。最後に、七十而從心所へ欲。不<sub>レ</sub>踰矩。と孔子は言っているが、書の道に当てはめる

と、書の本質を知るのが應にこの年齢くらいからなのではないかと考える。今正にインターネットの時代、キーワード一つで種々の答えが瞬時に表示される。しかし、それは正確な答えばかりではない。これぞ孔子の言う、多見闕殆。…であり、最後は自分の頭で考え取捨選択しなければならない。人間便利さを追求しここまで来たが、結果、考える力を失ないつあるのは、と危惧する。これからはより便利な電子辞書や書籍が台頭してくるであろう。私も偶に利用するものに、草書字典のソフトウェアがある。大変便利である。今迄の辞典でその文字に到達するにはかなりの時間を要した。しかし、その時間こそが大切だと考える。一文字をみつけるには、その周辺の文字を一つ一つ見ていかなければならぬ。その時思いもよらない文字に遭遇する。それが一字書の題材となることも少なくない。正にこの「腰」は柳腰の楊貴妃を表現したいと考えていたイメージに合致した。自分の思いを充分表現できたとは言えないが、この文字との出会いは、そうした中から生まれた。イメージを満足に表現するには墨色が大きく係わる。今後の課題は墨の研究である。微粒子を追求してきたが、素粒子にも別のメリットがあるものと考えている。が、今迄の日々は多忙すぎた。今後もたらされるであろう多少のゆとりの時間を、これらの研究にあてたいと考えるこの頃である。

# 書のひろば

理事長 辻 元 大 雲

## 生誕百年＝川崎白雲展＝盛大に

高知市文化プラザかるぽーにて、  
8月17日から22日まで開催された。

会場は展示大ホールと同じフロアの  
小ホールを使用、100点余の作品は川崎  
先生の生涯をほぼ俯瞰して素晴らしい  
展示であった。17歳の折の大切作品か  
らほぼ年代順に陳列された展観は緻密  
な学書から漂泊の書人と言われた晩年  
にいたるまでの生涯を見事に構成され、  
企画立案の恩地春洋先生の想いが具現  
されている。

書の古典への厳密な觀察と理論研究、  
徹底した臨書學習の積み重ねは展示さ  
れた資料がその一端を垣間見せており、  
さらに前衛書の先駆けともいえる作品  
群は先生の書に対する深さと幅広さを  
如実に物語り、晩年の慈悲溢れる率直、  
素朴な作品の数々は見る人の心を温か  
く和ませてくれる。日頃のわが身の喧  
騒と雑事に追われている状況を厳しく  
反省させられる展示であった。

局主管にて高知市文化プラザかるぽー  
とて開催され、会場は川崎白雲展会  
場をそのままお借りして、周りには川  
崎先生の遺作が展示されている中で行  
われた。普通このような会場使用は許  
されないと思われるが、主管の大野祥

雲講習会実行委員長のご努力により実  
現。広々した会場の中央にビニールで  
養生し、ゆったりとした中に周りの遺  
作に見守られながらの講習は緊張感も  
無い素晴らしかった。

8月21日初日は開講式の後、実技5  
科目をすべてこなすハーデスケジュー  
ル。宮澤梅径講師による「刻字」はサ  
ムホール大のセラミックボードに一字  
を筋彫り、色鮮やかな作品群は見事で  
あった。漢字は種谷萬城講師による  
「行書を書く」、かなは黒川江偉子講師  
による「半切に俳句を書く」、現代詩

文書は砂本杏花講師による「詩文を楽  
しく書きましょう」、前衛書は金井如  
水講師「前衛書への誘い」と一科目八  
〇分はあつという間に過ぎていく。二  
日目は「原拓書道史」を辻元大雲担当、  
「院史・川崎白雲作品を中心に」とし  
て恩地春洋会長が、最後の講演は地元  
高知のかるぽーと三階の漫画博物館小  
松康夫館長による「土佐の反骨精神と  
書の人脈」と題して、該博な知識と高  
知新聞編集デスクの経歴から愉快で楽  
しくまたいろいろ考えさせられるお話  
を伺った。充実の二日間であった。

## 第46回書道芸術院単位認定講習会 高知市にて開催

當役員46名（含む兼務）  
参加者102名（役員19名、ほか地元運

前衛  
詩  
相内珠莉  
龜井紫風

漢字 小竹正高 竹浪叙舟 橋 由紀  
秋季菊花賞（10名）

小林抱牛先生  
作田英嗣先生  
高橋松延先生  
岩崎石舟先生

毎日書道展漢字部会員、書道芸術院  
審査会員 79歳。

恒例の単位認定講習会は本年四国文

### 小林抱牛先生ら評報相次ぐ

猛暑続きのせいか、このところ評報  
が相次ぎ誠に残念。ご冥福をお祈り  
したい。

小林抱牛先生 8月18日ご逝去。  
毎日書道会最高顧問、独立書人団相  
談役。85歳。

作田英嗣先生 8月17日ご逝去。毎日  
書道会評議員、創玄書道会、67歳。

高橋松延先生 8月23日ご逝去。  
毎日書道展かな部参与会員、書道芸  
術院参与会員、85歳。

岩崎石舟先生 8月16日ご逝去。  
毎日書道展漢字部会員、書道芸術院  
審査会員 79歳。

入選（40名）

漢字 朝倉希代子 板橋雅邦 今関心華  
大山和歌子 河岡星扇 衣田琴草  
君島春翠 篠原楊流 田中真美枝 谷田熾義  
小林椿寿 近藤翠香 佐藤桂香 小林青峰  
篠原楊流 田中真美枝 谷田熾義 小林青峰  
当内一香 本田江燕 前浜裕香 星野栄子  
田村玲子 橋本紅霞 佐々木豊苑 白地清柳  
乙倉翠芳 小野寺津源 加藤紫翠 新宮文葉  
佐々木百合子 下沢博美 須田香舟 米田智子  
多田桂彩 三宅佳峰 大友紅葵 大野礼子 大村直子  
筆・刻 大沼樵峰 佐々木祐子 下沢博美 須田香舟  
前衛 前衛 佐々木祐子 野口加奈 藤原紅雲  
高木百合子 野口加奈 藤原紅雲



### 秋季菊花賞に小竹正高さんら

#### ＝秋季展公募入賞入選者決まる＝

本年で3回目となる秋季展審査会員  
候補公募審査は8月20日、講習会場の  
高知市文化プラザかるぽーとで行われ、  
審査の結果は以下の通り。

応募総数280点 178名、入賞入選計50点  
は秋季展会場に陳列される。

前衛  
詩  
相内珠莉  
龜井紫風

恒例の単位認定講習会は本年四国文

當役員46名（含む兼務）  
参加者102名（役員19名、ほか地元運

前衛  
詩  
相内珠莉  
龜井紫風

恒例の単位認定講習会は本年四国文

## 現代詩文書 (六)

坂本素雪



金子鶴亭氏は「芸術は生きていなければならぬ。生きるがためには、その中に自己の真実を語らなければならぬ。そして生きた芸術を作るためには、新しい内容を盛るにふさわしい、新しい形式を創造していかねばならない」と言つてゐる。

我々は書を学ぶ時、誰もが古典臨書から始める。しかし、これは永遠の技術修練の場であり終わりはない。自分の肥料にし、太陽にし、水にする。これを栄養として、自己の真実を語る作品を作る。

また、金子先生は「守拙」15号のかで、「古典を自分の栄養としてとり、あとは捨ててしまえ。古典は全てその時代の前衛である」とも言つてゐる。古典を大事にしあげ、そこから脱却出来ず、ともすれば古典が作品制作の邪魔になるのである。詩文から得た感情を制約のなかに置いてしまってはいけない。しかし、古典を捨ててしまふという意味が理解できないと、この殻を破り脱却することはなかなか容易でない。いかに自分を語り、相手の心を搔き立てる作品を作るかは、芸術に関する幅広い見識を養うことにある。線の芸術は奥深く、未来永劫に続くものである。し、我々に課せられた二十一世紀の課題であろう。

### 他力の教え

板画家棟方志功が富山県に疎開中に真宗の教えにふれてから「仏教でいう〈他力〉を信する」と、板画は自然に生まれてくるもの。私は仏さまの手先になつて版木の上を転げまわつてゐるだけです。仏の慈悲を感じながら謙虚な創作姿勢に變つた」とあり、前衛書作のヒントがくされていると思い、いつそう棟方作品が好きになりました。

## 21世紀の書

### 私の主張

## 前衛書 (六)

平岡千香子



平岡千香子書

んなに含蓄のあることばも受け取る側の素地がなかつたら届きません。当時の私は横着者で自らの努力を丸投げにして、海月丸に乗船してさえおれば他力を願により力がついてくるものと、まったく身勝手な解釈をしておりました。そして、不勉強という名の「大きなツケ」の襲来に悪戦苦闘の毎日です。私の課題は、安直に芸術という言葉を口にしないで、まず第一に職人技を磨くこと(理屈抜きで身につける)です。ひたすら精進する中でこそ、きっと「生かされている自分」に気づかせていただくことができるものと信じています。

前衛書のパイオニア=井上有一の言う「絵かきのできそこないにもならぬ前衛書というもの」に陥らないために、「今」しかない命を燃焼させたいと念じています。

「明日ありと思う心のあだざくら、夜半に嵐の吹かぬものかは」—親鸞9才の時詠まれたと教わったのは20代の時今は亡き師、深松海月先生からです。ど

古典を栄養源として自己を語る  
作品とは、「地に砂鉄あり不斷の泉湧く」

坂本素雪書

「和敬清寂」韓・日国際交流書藝展

## 書と刻字の出会い

栢野青溪

(篆刻・刻字部審査会員)

私と書との出会いは、富士山がきれいに見える、椿峰コミュニティ会館の書道サークルに入会させていただいたことから始まります。

筆で名前が書けたら嬉しいなと軽い気持ちでした。最初に習ったのは仮名で、四号の筆での伊呂波でした。

それも長くは続きませんで、先生が大病で突然入院された為、教室は終わりました。

道具を片付けながら残念に思い、機会があれば習いたいと思っておりました。娘は、所沢へ引越しても千葉の市川先生の教室へ行っていましたが、ご主人の転勤で海外に行かることになり、加藤眺溪先生を紹介してくださり、すぐ伺いました。

所沢駅から歩いて、プロペ通りを抜け、求友館というところに行きました。勝海舟の自筆の額が飾ってある部屋で、先生が一人いらっしゃり、如石先生が、硯や墨筆等を洗う子供を、こま

めに手伝つていらっしゃったのを覚えています。

娘が練習している時は、教室の後で本を読んだり、レースを編んだりして待つておりました。

そんなある日のこと、如石先生から、一緒にしませんか?と声を掛けていたとき、書道芸術院の書に入会させていただきました。

刻字との出会いでもありました。その当時は、刻字だけは曜日や場所が違つて、中央公民館にも足を運びました。

刻したり、ノミの使い方、かご字の取り方、など道具一つ取つても使い方を教わらないと出来ず、板も先生に選んでいただき、どちらを上にするか下にする今まで教えていただきました。

『ノミを垂直に打ち込む』、これも何度かの経験で、小さな作品から大きな作品へと少しづつ出来る様になりました。

『色づけば、好みの色で』、これな

ら出来ると思ったものの、金箔で苦労しました。手に着いてだめになり、竹の箔バサミが風に当たつても無駄になりました。

展示会で作品を拝見したり、教室にいらっしゃる多くの先輩からも手ほどきを受けて、何とか作品を完成させていました。

最初に刻したのは日刻板で『樂』でした。

日本刻字協会展も第一回展から出品する事が出来ました。皆さんの作品を見せていただく事で勉強になりました。教室で皆さんに会い、笑顔で話が出来るもの楽しみですが、子供の手が離れてから参加している、春と秋の研修旅行も色々と想い出深いものがありました。

初めて参加した修善寺では、ラフオーレに泊り、般若心経を扇子に書きました。写経と違い、行間やまとまりを学びました。

金沢では、刻字で使う金箔の工程や、漆で作品を作るのを見学しました。富山では、寺院の彫りや欄間の彫刻をされているのを見学したり、ノミを購入して来ました。

出雲崎では、良寛の書の美術館や五合庵を訪れました。山深き廻に修行を経て出雲崎に帰つて来たそうです。庵は冬はさぞ寒さが身にしみたのではと思いつましたが、厳しさを乗り越えた後的新緑の頃はとても美しく感じられたことでしょう。

研修旅行に限らず、旅行は大好きで、今まで数え切れないほどのいろいろなところに行きました。

美術館めぐりも大好きで、国内はも

ちろん海外に行っても鑑賞して来ます。

北京の故宮博物院には、所沢書道会の人たちと一緒しました。漢字の国人の人と、漢詩のすばらしさ、見る処の多さ、石刻、崖碑、寺院のすばらしさ…古いのに残されているのは、大切に思

うから守られたのでしょう。

上海、杭州、広州、宝物の多さは、何度も訪れないと観る事は出来ないと、書道の先生方がたびたび訪中されるのも分かる気がします。

去年10月に四国を訪れました。大塚

美術館では陶板での西洋画を鑑賞しま

した。フランスやイタリアの美術館で鑑賞した油絵とは違つて見えました。

耕三寺の近くで村上三島美術館を訪ねました。四国大橋の碑も村上三島書

となっていました。四国は石も出る所だから、たくさんのがあるのかと感心しました。見ごたえのある旅でした。

今年の春、台湾へ行き故宮博物院を訪ねるつもりです。宝物は台湾に多く運ばれているとも聞いていますので、今から楽しみにしております。

文才の無さ故に、つたない文面で申訳ないと思いながら筆を置きます。

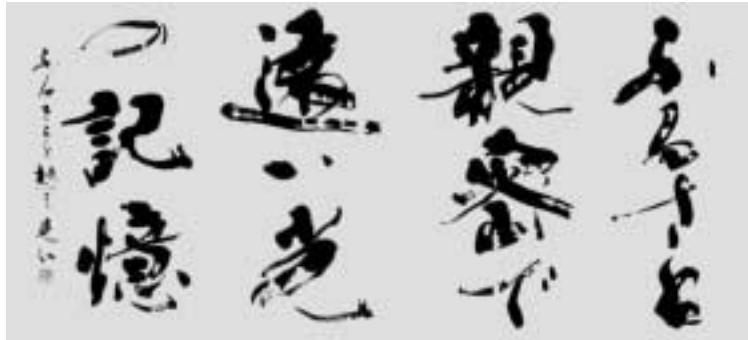
5

会員賞



大隅 晃弘  
(近代詩文書部)

この度の第62回毎日書道展会員賞受賞、身に余るこの重みに、大変恐縮いたしております。これも、心温かく的確なご指導を与え続けて頂いた諸先生方と、多様な書の分野と表現を幅広く学ばせて頂いた書道芸術院という恵まれた環境があったからこそと、改めて感謝を申し上げる次第であります。



近代詩文書部 大隅 晃弘

不足であることは認めざるを得ません。  
今回の受賞に満足することなく、日々努力奮闘する覚悟であります。今後とも末永く御指導くださいますよう宜しくお願い致します。

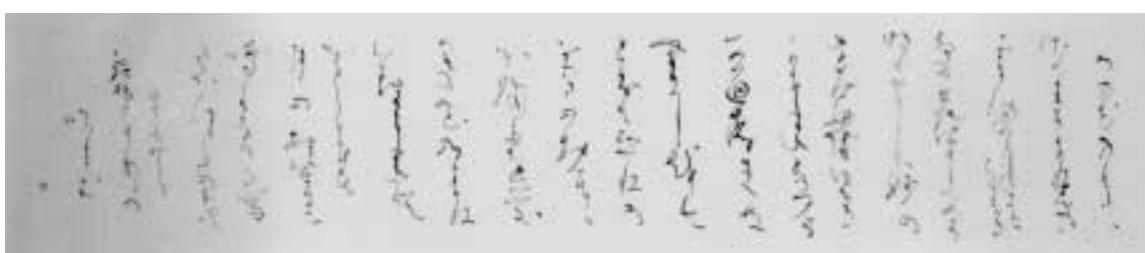


第62回毎日書道展会員賞選考委員



毎日書道展会員賞（副賞）  
置物

文部科学大臣賞



かな部 遠藤枝芳

## 特集：第62回毎日書道展

# 第62回毎日書道展総評

## 辻元大雲

東京都美術館改修に伴い、本年と来年は陳列ばかりでなく、搬入・鑑別審査・会員賞選考など全てに影響し、事務方は大変な苦労を強いられることとなつた。公募・会友の搬入作業は毎日ホールで昨年通り特に問題はなかつた。5月の鑑別段階も順調に運んだ。问题是6月の審査から、表具された作品の搬入受付、整理はA入選と会友のみを扱う漢字・かな・近詩部と全作品を対象とするその他の部門に分かれ、B入選は期日をずらして搬入整理、さらにこれまで都美で行つていた会員・審査会員作品の搬入整理は公募・会友の審査終了を待つて入れ替え、特別選考の体勢を整えることとなり、正に目の回る忙しさと複雑な業務であつた。

東京展陳列も同じで、国立新美術館

のみとなり、地方展作品は陳列されなかつたが、会員以上と入賞作は全て前後期、更にⅠⅡ期と四期に分けての陳列となり、作業する陳列部も見学する皆さんも大変であったと思う。

今回特筆されるることはやはり「書・学一如の世界」生誕110年記念松井如流展」であろう。松井先生の生涯を書を中心として四つのテーマでの展観は參觀者を魅了し、圧倒的な存在感と何と

も暖かい人間如流の息づかいまで感じさせてくれた。会場は連日多くの参觀者で溢れ大盛況であつた。記念に発刊された図録は内容充実、素晴らしいものでは非座右に備えておきたい大冊である。東京展会場でしか行われないため、残念ながら見逃した方や地方の皆さんは図録での鑑賞をおすすめしたい。毎日書道会へ直接申し込んでいただければと思う。一冊三〇〇〇円。

鑑別審査は前述のとおり、煩雑な作業をこなしながらではあつたが、ほぼ昨年通りに進行した。当番審査員はじめ、審査部、総務部ほか各部を担当された方々の労苦に感謝したい。公募入選の50%は例年通りながら、本院各部の成績は部によって40%代まで下がる入選は期日をずらして搬入整理、さらにこれまで都美で行つていた会員・審査会員作品の搬入整理は公募・会友の審査終了を待つて入れ替え、特別選考の体勢を整えることとなり、正に目の回る忙しさと複雑な業務であつた。

東京展陳列も同じで、国立新美術館のみとなり、地方展作品は陳列されなかつたが、会員以上と入賞作は全て前後期、更にⅠⅡ期と四期に分けての陳列となり、作業する陳列部も見学する皆さんも大変であったと思う。

今回特筆されるることはやはり「書・学一如の世界」生誕110年記念松井如流展」であろう。松井先生の生涯を書を中心として四つのテーマでの展観は參觀者を魅了し、圧倒的な存在感と何と

部門を擁し、更に全国13の総局・支局を基に、縦横のつながりをバランスよく展開している院の方向性は間違つてないと思う。しかしここぞという時の力のまとまりが前述の通り希薄となり、分散してしまうのである。これをどう克服するか。今後の課題の一つとして皆さんとともに考えていきたい。何はともあれ今回の大隅晃弘さんの受賞作は堂々正攻法の作品で素晴らしい作で今年の大好きな収穫であった。共に慶びたい。席上揮毫も担当され大喝采を浴びた素晴らしい成果でした。

7月12日には午前中、赤坂プリンスで田宮文平氏による講演会、松井如流をテーマに多くの聴衆を魅了した。同日午後1時半より表彰式。2千余名の参列者で会場の五色の間は立錐の余地もない賑わい。3時半からの祝賀会はクリスタルホールに、ここも人人で大変な混み合い。受賞された皆さんの晴れがましい笑顔が美しかった。

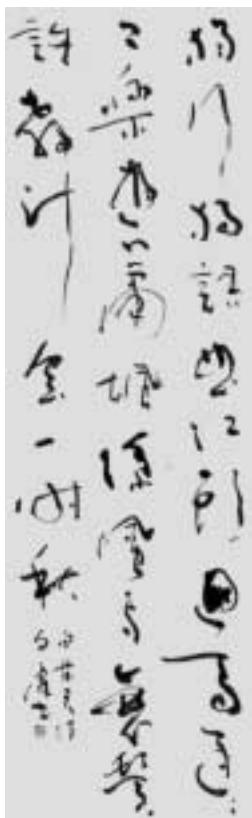
夕刻5時過ぎから会場を虎の門の日本プレスセンタービル、アラスカに移し書道芸術院の祝賀会。寺田健一毎日書道会専務理事、西村修 次期事務局長もお見えいただき、錦上華を添えてくださつた。180余名の参加で大いに盛り上がつた。

今回展は関西展砂本杏花、四国展大野祥雲 東北仙台展浜田堂光各氏と3会場の実行委員長を院関係役員が担当する。他の会場と併せ、会員諸氏のご支援、ご協力を願いしたい。

## 第61回毎日書道展公募出品点数（会友含む）および入賞数

項目	毎日展総出品点数				芸術院出品点数				芸術院入選点数				毎日賞				秀作賞				佳作賞				U23毎日				U23新锐				U23獎勵			
	総数	会友	一般	U23	総数	会友	一般	U23	総数	会友	一般	U23	総数	芸術院	総数	芸術院	総数	芸術院	総数	芸院	総数	芸院	総数	芸院	総数	芸院	総数	芸院	総数	芸院						
漢字部	13,277	2,400	10,177	700	369	67	288	14	200	67	127	6	92	2	211	5	422	11	5	7	29	1														
かな部	5,455	1,056	4,214	185	278	49	226	3	179	49	128	2	40	2	92	5	185	9	1	2	7															
近代詩文書部	7,177	1,446	5,111	620	520	136	340	44	304	136	149	19	54	3	123	8	247	15	5	7	1	26	1													
大字書部	2,709	552	1,893	264	232	73	142	17	151	73	71	7	20	2	46	4	91	9	2	3	11	1														
篆刻部	628	95	490	43												4	11	21												2						
刻字部	931	106	794	31	116	29	85	2	80	29	44	7	7	1	16	2	32	4										1								
前衛書部	1,715	285	1,315	79	532	102	380	50	320	102	192	26	13	3	29	8	58	16	1	1	1	3	2													
合計	31,892	5,940	24,030	1,922	2,047	456	1,461	130	1,234	456	711	67	230	13	528	32	1,056	64	14	1	20	1	79	5												

毎 日 賞



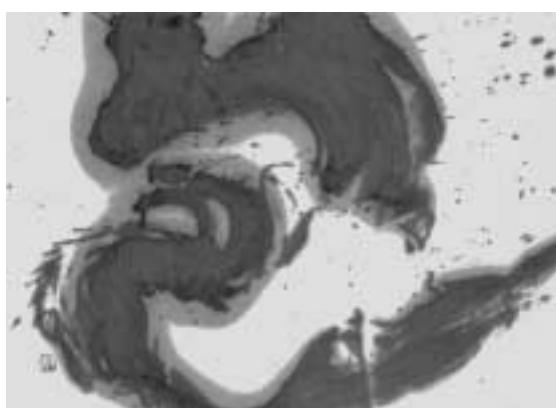
漢字部 I類  
島田白露



かな部 I類 九條純代



近代詩文書部  
武山櫻子



大字書部 阿瀬浜翠燕

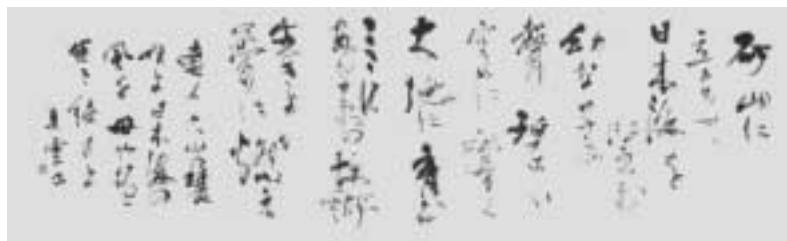


前衛書部 尾形紅霞

毎 日 賞



前衛書部  
浅野彩紅



近代詩文書部 国吉真雲



かな部Ⅱ類  
庄司紅邨



刻字部 安田憲子

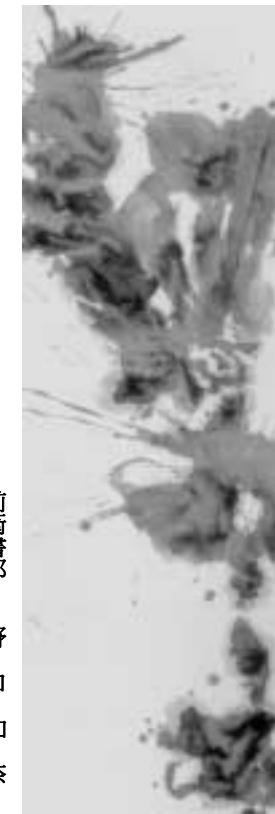


漢字部Ⅰ類 清水秀鳳

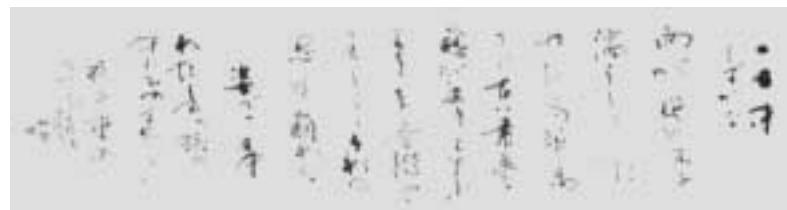
大字書部  
清遠  
瑞



毎日賞



前衛書部 野口加奈



近代詩文書部 末岡紅樹

U23毎日賞

副賞



佳作賞（副賞）文鎮



秀作賞（副賞）筆置



毎日賞（副賞）筆洗



前衛書部



U23奨励賞（副賞）



U23新銳賞（副賞）



U23毎日賞（副賞）



後藤美希



左の法帖の中から何文字臨書してもよい。(掲載部分以外は不可)

特別研究部臨書課題

（全紙以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

〈解説〉宣示表は、淳化閣帖に刻入されたのが、世に広まった最初だと思われる。その後、大觀帖はじめ宋刻の諸帖、また明代の多くの集帖に散見するが、それぞれ多少の異同がある、それを信じてよいのかわからない。

掲載は中国法書選（玄社）より

（編集部）

權疏曲折得宜。神聖之慮。非<sub>四</sub>今臣下所能  
有<sub>一</sub>增益。昔與文若奉事先帝。事有<sub>二</sub>數者。  
有<sub>レ</sub>似<sub>一</sub>於此。粗表<sub>二</sub>一事以爲。今者事勢尚當<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>  
所依違。願君思省。若以在<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>慮。可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>須<sub>レ</sub>復完<sub>一</sub>

※落款を必ず  
入れる  
署名。もし  
くは〇〇臨  
(押印のみ  
も可)

權疏曲折得宜。神聖之慮。非<sub>四</sub>今臣下所能  
有<sub>レ</sub>增益。昔與文若奉事先帝。事有<sub>二</sub>數者。  
有<sub>レ</sub>似<sub>一</sub>於此。粗表<sub>二</sub>一事以爲。今者事勢尚當<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>  
所依違。願君思省。若以在<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>慮。可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>須<sub>レ</sub>復完<sub>一</sub>

有<sub>レ</sub>增益。昔與文若奉事先帝。事有<sub>二</sub>數者。  
有<sub>レ</sub>似<sub>一</sub>於此。粗表<sub>二</sub>一事以爲。今者事勢尚當<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>  
所依違。願君思省。若以在<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>慮。可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>須<sub>レ</sub>復完<sub>一</sub>

(90%縮小)

## 特別研究部臨書課題

= (全紙以内・縦横自由) 左記の掲載以外も可

よみ  
よのなかはなにかつねなるあすか  
河きのふのふちぞけふはせになる  
いくよしもあらじわがみはなぞまか  
くあまのかるもにおもひみだるゝ  
かりのくるみねの朝ぎりはれ  
すのみおもひつきせぬよのなかのう  
さ

## &lt;解説&gt;

元永本古今集の巻十八・十九では、  
さまざまな表現形式が集約され、特  
異な放ち書きが見られる。意図があつ  
て書かれたものであろうが、意連に  
よって筆者の心の流れが感じられる。  
その他、特殊な割書き(分ち書き)  
や、文字の絡みの姿など斬新な手法  
もあるが、この古筆を味わうには特  
に、見開き二頁で鑑賞することを薦めたい。

筆者は源俊頼と伝わったが、今日  
では本願寺三十六人家集の貫(集上、  
人磨集など)と同筆で、藤原定実(さだね)と推  
定されている。(上記は巻第十八)

(編集部)

習い方解説 (六)

濱田尚川

春風秋月恒好  
(しゅんぷうしゅうげつねよ)

春のよき風に秋のよき月  
幾年対して見ても飽きぬ。

派手ではなく渋味ありじっくり  
落ちついて味わえる作品をねらっ  
てみた。菘翁の潤茂清勁、枯淡、  
氣韻性情等と評される味から学び  
とする重要性を考えたい。

筆毛のねじれを生かして力強い  
線、ねばりのある線(筆力遒勁)  
こそ現在一番欠けている所ではな  
いかな。線が浅くてさわがしさが  
眼を射る作品の何と多いことか。  
本物の書を古典の臨書を通して  
学びとった菘翁の書は宝である。  
赤壁賦、白玉井銘、左繡叙稿、松  
井遊見叟碑文稿どれを見ても何と  
も言えない線質に打たれる。

春 風 秋 月 恒 好

よみ (春風秋月恒に好し)

書体=自由



習い方解説 (六)

小川弘舟

天高氣清（天高く氣清し）  
秋の清澄な風景が連想されます。

人として知られている顔真卿の楷書を参考にしました。

顔真卿の楷書は、一般的には肉厚で堂々たるものが多い。起筆を藏鋒で入り、横画は細めで縦画が太く、形は丸々とした豊満で堂々たるスタイル。筆の開閉を十分にし、はねの所で筆を直立させてはねる、右払いは筆圧を加え、払う所で筆を立て直してから払いします。

今回で終了しますが、平素から古典の勉強に親しみ、その上で倣書（臨書した書風で書く）し、創作へ発展させて下さい。

天高氣清 よみ（天高く氣清し）

書体＝楷書



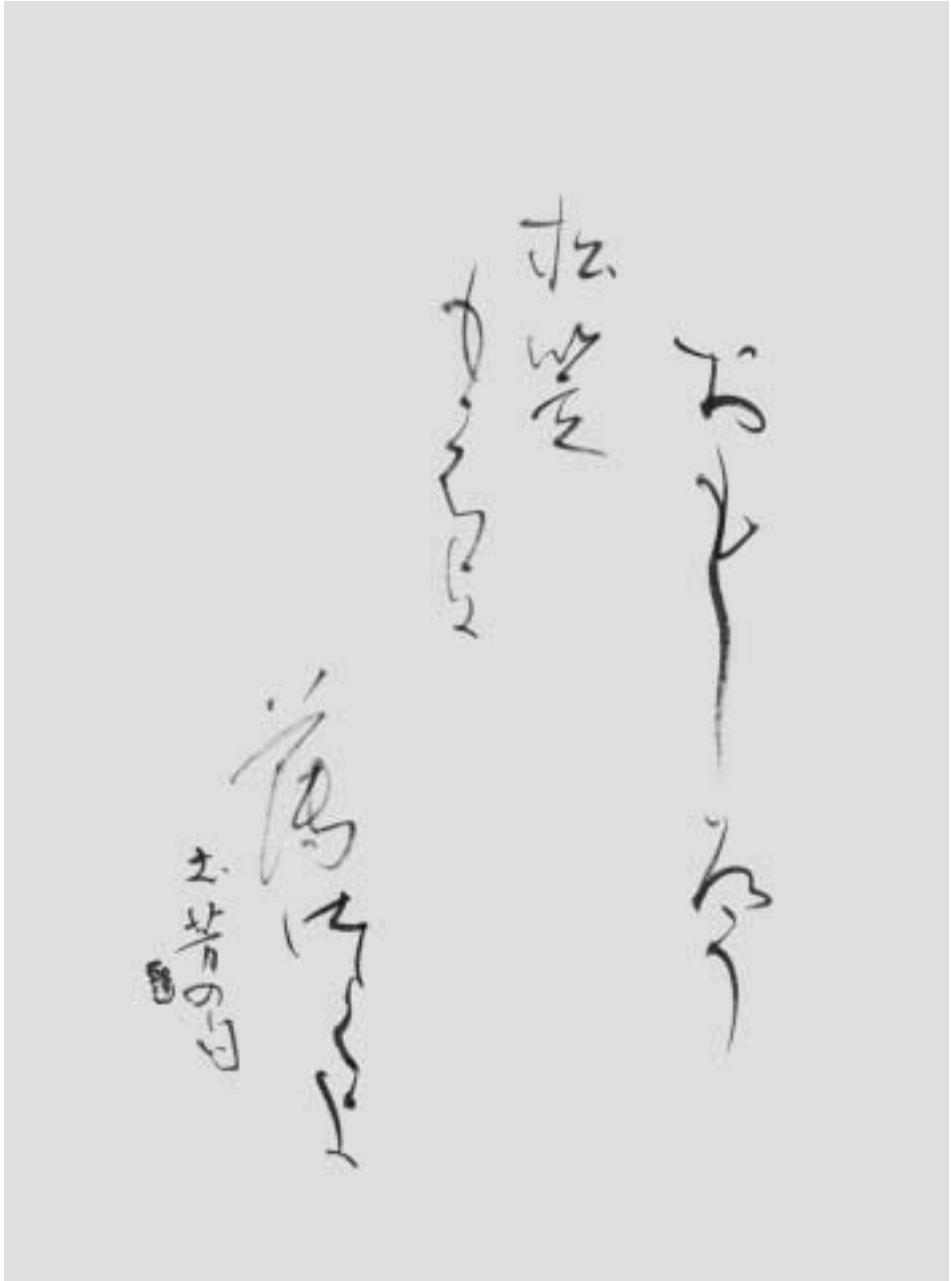
かな規定 初段以上【十月十五日締めきり】用紙 半紙普通判(料紙可)

下谷洋子選書

### 習い方解説 (六)

下谷洋子

おもしろうつ松笠もえよ薄月夜  
(土芳)



単純なかな文字は、連綿の方法によって同一文字でもかなりの変化をします。特に変体かなは、一つの文字でも書き方は多彩で、そこがかなのおもしろさでもあります。また難しいところもあります。そのつど覚えていくしかないのですが、大切なのは、原字を正確に知っていること、さらに草書の骨組みを正確に理解していることです。参考手本もそうですが、先生からのお手本の文字を理解せずに書くことは絶対に避けたいですね。その上で自分のリズムが乗せられれば、少しずつでも自分のかなが生まれて来るでしょう。リズムを乗せることは、書き急ぐことではなく転折での息つきによって緩急を出すことです。

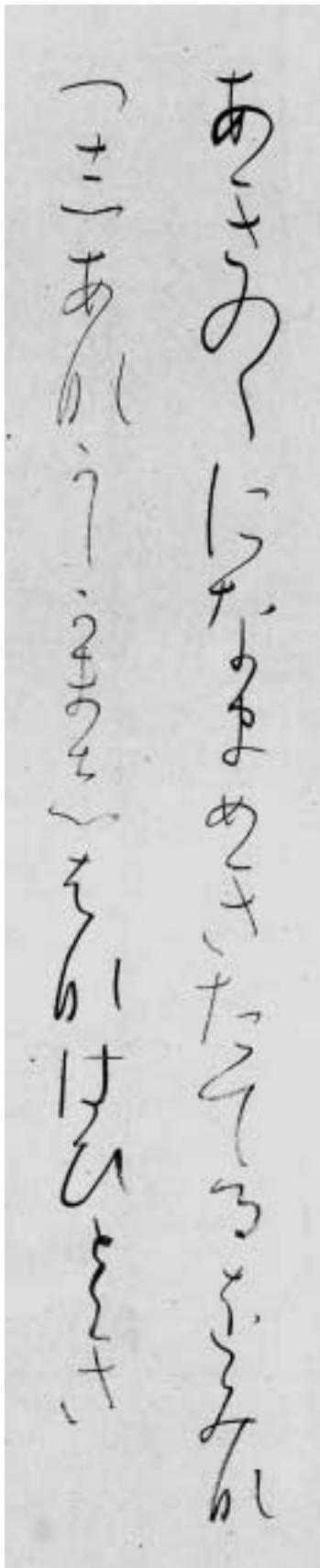
土芳 江戸前・中期の俳人、伊賀国上野生まれ。芭蕉晩年の俳論をまとめ全作品を集成した。  
よみ方 おもしろう(岳)う松笠もえよ(与)薄づ(徒)く(久)よ 土芳の句

創作

かな規定 秀級以下【十月十五日締めきり】用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$  (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全體、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種  
(掲載写真縮小93%)



よみ方 あきのゝになまめきたてるをみな(那)

へし(志)あな(那)か(可)しが(可)まし(志)は(者)な(那)はひとゝぎ

かな条幅規定【十月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切(料紙可)

大辻多希子選書

### 習い方解説 (三)

大 辻 多 希 子

秋草をもたらし塞ぐ燈下かな  
(中村草田男)



半切に俳句を一句は、空間が多くなります。長く縦に伸びる線と横に張る線を配置し余白が単調にならないよう注意します。書き出しどと最後に短い行を入れました。

真中の長い行は少し揺らせ余白が動くよう心掛けました。逆筆や転折を強くする事により、字数の少ない作品がさびしくならないので工夫しましょう。

創作

よみ方 秋く(久)さをもたらしふ(布)せ(佐)ぐ(眞)燈下か(可)な(奈)

\*たて形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 [十月十五日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

半田 藤 扇 選書

### 習い方解説 (六)

半田 藤 扇



走馬西來欲到天 辞家見月兩回圓 今夜不知何處宿 平沙萬里絕人煙

(馬を走らせて西へ来天に到らんと欲す 家を辞して月の兩回圓なるを見るを見る)  
(今夜知らず何の処にか宿せん 平沙万里人煙を絶つ)

(参考)

書体=自由

最終回となりました。6回の中  
で条幅の書法として「一行・一行・  
三行(今回)」とバラエティーに試  
みてみましたが、如何でしたか?  
文字数・画数によって表現の仕  
方が異なり、また使用する筆によっ  
ても線の妙技を生じます。試行錯  
誤しながら心をこめて取り組んで  
ください。先月と同じ牛耳筆を使  
用。

漢字条幅規定 秀級以下 [十月十五日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

吹田 紅扇選書

### 習い方解説 (六)

吹田 紅扇

「大空をきり開いて雲霧を払いの  
け、太陽を見る思いがする」詩を  
賞讃した句。  
丁寧に運筆しましょう。  
太目の羊毛中鋒を使用しました。

披天扶雲霧 (天を披きて雲霧を扶う)

袁宏道

書体=自由



習い方解説 (六)

小伏小扇

朱雀門・東院庭園に統き  
大極殿の復原もす一三〇〇年  
前の京都の姿を偲ばせらる

平城宮跡 ひとどき特集うち小扇書

最終回となりました。文字を美しく  
書くには、実際にペンを執って繰り返  
し、繰り返し練習するしかありません。  
与えられた紙面と、書こうとする文章  
の分量をよく考えて、全体の調和を計  
ります。線は強く、ペンの当たりは柔  
らかに、大きくなったりと運筆します。  
何をおいても基本が大切ですから、点  
画の緻密さと周到な運筆をよく観察し  
ながら練習してください。

※落款を入れ忘れないようにしてください  
さい。(落款は自分の名前を入れて  
ください。)

用紙=はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体=自由

今月の

## ホープ作品 各部総評

No. 591

漢字部 師範 外山 卿舟

大胆な運筆が筆の開閉を伴い、動きある草書作となった。二字目「心」は「門」と誤り易いので注意。

◎漢字部総評 上級全般的に低調。

特に草書表現は誤字、別字になりやすいので要注意。自信なければより正確な字形で。(大雲評)



漢字条幅部 師範 岩崎 薫風  
押しても叩いてもビクともしない  
い強い線質の隸書作。長年の練磨、  
古典学習の歴史が窺われる。

月來池上花光淨雨  
かな条幅部 五段 内田 韶景

古筆の成果が窺えて文字の把握が正確、その上リズムが自然で快い。更に蔵峰を加えて深みを、かなは特にリズムが必要です。筆圧を加減し滑らかに。(洋子評)



前衛書部 特選 遠藤あかね  
側筆・直筆を巧みに用いている  
上、線質も鋭い、構成でも余白の  
美を充分表現された作品である。

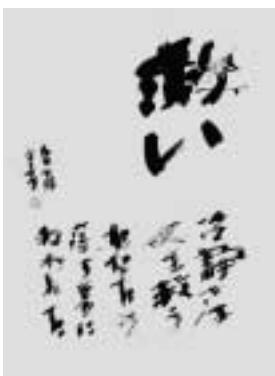
◎前衛書部総評 墨色・構成を考  
えた作が多く、大胆な作や重量感  
溢れた作品少なかった。(洞仙評)



現代詩文書部 特選 荒川 空華

余白の用い方・線質の変化とも  
に絶妙。詩意を書表現に内蔵させ  
落ち着きの中に品位を表出す傑作。

◎現代詩文書部総評 誤字にしや  
すい漢字あり。特に「武・酒」に気  
をつけ揮毫して下さい。(舟雲評)



◎漢字条幅部総評 文字を正しく  
確認することが第一歩。字典で必ず  
調べる習慣が欲しい。草体に誤  
り多し。(翠風評)

かなの筆で、漢字の浅・撫の誤字が多く残  
念。かなは特にリズムが必要です。筆圧を  
加減し滑らかに。(洋子評)

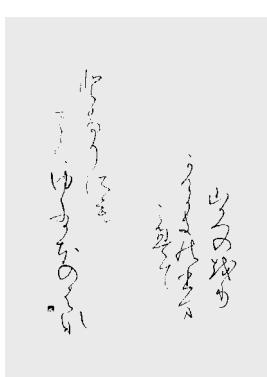
ペン字部 師範 東平 純子

漢字と平仮名のバランスが非常によく、力強くしつかりした線は

魅力十分。堂々の作品です。

◎ペン字部総評 全体的には比較的書きやすい題材だったようですが、

作品を期待しています。(鄭街評)



かな部 師範 藤丘 茉萸  
自然に流れるしなやかな筆遣い  
と美しい墨の変化が相俟って、魅  
力ある世界を生み出して見事です。

◎かな部総評 構成よい作多く好  
ましく拝見。一部上級者に誤読、  
脱字等あり残念。解説の熟読で解  
決できる筈。慎重に。(明子評)

かなの筆で、漢字の浅・撫の誤字多く残  
念。かなは特にリズムが必要です。筆圧を  
加減し滑らかに。(洋子評)

今月の

# 特別研究部優秀作品(特選)



178×60cm

山崎 恵書

前衛

(書蓮) 山崎 恵

「桜」

◆濃墨を速度をつけて表現するのは難しい。力一杯迫力ある線の表現は見事。白を生かす事も一考を。

(倫子評)

◆躍動感に溢れ一気呵成。筆圧と筆勢が大きく線の重厚さで圧倒する迫力がある。素晴らしい気迫です。

(萬城評)

◆気満と力感に溢れ、観る者を圧倒させる迫力は前衛書ならでは。久々に紙面と格闘した熱い書に感動。(洋子評)

◆ダイナミックな運筆が気迫を伴って力強く紙面を構成する。中央部の渴筆やや上すべりか。期待大。(大雲評)

現代詩文書 (白珠)  
工藤永翠



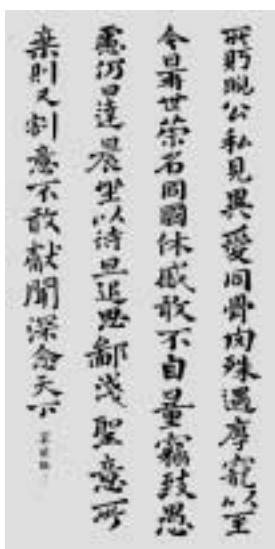
136×70cm

「遠野物語」より

臨書 (千葉)

益子翠蘭

「宣示表」



136×70cm

益子翠蘭臨

◆筆先の巧みな動きを小さい字の中に表現し墨だまりを使って紙面全体に変化をつけ楽しい作品。(大雲評)

◆微細な線條を巧みな文字造形で不思議な世界を演出する。構成の大膽さが余白の爽やかさを生む。(萬城評)

◆章法を工夫した着実な臨書。好感が持てる。線に温か味があり、温厚。ハネとハライに深さが欲しい。(萬城評)

◆詩文書としては時折見かける構成だが、何よりも特異な造形と線質で意表を突く。感性が煌めいて作。(洋子評)

◆臨書の姿勢としては真面目で好ましい。宣示表の穏やかな温かさがよく表れているが終筆が少々硬い?(洋子評)

◆活動的な筆の動き、全体に繋がりを見せてくれる。終筆のはねる所など力を抜き過ぎた感がする。(大雲評)

(倫子評)

道 梅 木 鑄

漢字 (墨宣)



135×35cm

## 「菩薩蛮」

- ◆やや硬目の筆を使用か、鋭い筆致が爽快で、適度な渴感がある。筆が紙面に動きを与えて完成度の高い作。（大雲評）
  - ◆よどみない筆の動き、そこから生れる線の動きが一致して流れる紙面を美しく見せてくれる。（倫子評）
  - ◆複雑な字画の多字数を、広い行間と画の間<sup>ま</sup>ですっきりさせ、俊敏な流れが一層美しく輝いている。（洋子評）
  - ◆行間を空け、縦の流れを強調した章法が作品を明るくし、線の切れ味が一層効果的に仕上っている。（萬城評）

「母」  
桐谷優華

(うるいど)



桐谷優華書

178×53cm

- ◆自作の詩でしようか、やや走りすぎかとも思うが衒いなくまとめ、氣字大きく、筆一本の醍醐味出る。

(洋子評)

◆青墨の潤渴の変化を生かし、一本筆による破筆の効果と相乗して動きある作となつた。もう少し整理を。

(大雲評)

◆筆の運びで面白さを表しているのが紙面に躍動感を出している。二本の筆か一本が分れたのか面白い。

(倫子評)

◆躍動感に溢れた筆の動きは巧妙で、線の表情が豊かで惹かれる。詩文の内容と書風にやや違和感あり。

(萬城評)

田子白嶺

## か な (書泉)



175×53cm

「新古今の歌」

- ◆墨つぎの効果が実際に巧み、紙面が生き生きと見える。
  - ◆渴筆の表現は筆先の変化が見られず残念です。（倫子評）
  - ◆渴筆からスタートし、中途で滲みの変化を加えた一行は巧妙。二行目は渴筆のみでやや単調か。（萬城評）
  - ◆寄せた一行のバランスが巧みで、合わせて墨量の配分にも留意しモダンに仕上げた。さらに研究を／（洋子評）
  - ◆中央部に二行を凝集し、緊張感を生む構成が魅力。書き出しの渴筆部がやや甘く焦点がボケたか。（大雲評）

田子白嶺書

創作の部(64点)	漢 — 11点	か — 10点	現 — 24点	か — 10点	現 — 24点
臨書の部(28点)	漢 — 26点	か — 2点	前 — 18点	篆 — 1点	前 — 1点
特選候補者	大雲	大隅	晃弘	大雲	大隅
漢(創)	千葉	今関	梨霞	千葉	今関
92点	一弦	木村	貴衣	一弦	木村
総出品点数	卯月	前田まさ美	卯月	前田まさ美	卯月
前	現	新谷嵐泉	現	新谷嵐泉	前
翠柳	陽陽	岩崎陽光	翠柳	陽陽	翠柳
湘南	もく	西川藤象	湘南	もく	西川藤象
漢(臨)	蓮紅	鈴木翠夢	漢(臨)	蓮紅	鈴木翠夢
英峰	佐藤詠子	大友紅香	英峰	佐藤詠子	佐藤詠子
澄春	うる	川崎小枝子	澄春	うる	川崎小枝子
新行内芳蘭	千葉	大内焚軒	新行内芳蘭	千葉	大内焚軒

漢字研究部  
(宣示表)

選評 小伏小扇

今月のホープ作品

愛 同 骨  
肉 殊 遇

佐 藤 桂 香

◎漢字研究部 総評  
筆がたって、線が冴えています。ゆつたりとした運筆は、宣示表の心をとらえて、清々しい感じがします。古雅で自然の妙趣この上ない特長を見事に表現した佳作です。  
もう少し特徴をつかまえて、書きこめばよくなる作品が沢山ありました。原帖をよく観て書きましょう。右上がりの気分を極力おさ

漢字研究部 特選 佐藤 桂香  
えながらひときわ目立った横画が表われるのが鍾繇風楷書の特徴です。直線的で文字の構えの左側により突き出たものが多く、この画の主張が扁平な造形を生んでいると思います。  
宣示表を見て、まず目にとびこんでくるのがこの横画でしょう。自分自身で原帖にあたり基礎力をつけてください。



星溪幸香史弘  
扇泉平楓遊晃

岱裕久久箕由  
雲映子仙城子

江翠侑雅敏竹  
彩香豊芳子寿

桃雲信靜臯叙  
華卿代城月舟

か な 研 究 部  
(元永本古今集)

選評 山 藤 美知子

今月のホープ作品

老いた  
語句は  
もう古事記のものだ。  
あれから何十年かで、  
その古い言葉が、いつの間にか、  
新しい言葉へと置き換わる。それが、  
時代の流れだ。しかし、その古い言葉を、  
いつまでも残しておきたい。それが、  
古事記の意味だ。

嶃与祢子

◎かな研究部総評

「名作散〔散さ〕」の誤字が本当に多く、全体としてはよく書かれているのに一字の誤字のために、駄目になつた作見られ残念。歌を読みながら書く事。

かの研究告 特選 峰 上村元永本古今集の多種多様の書写様式をうまく表現できています。線に繊細な味わいの軽妙な動きがあり、また慎重な筆運びなどの表現は見事。秀作です。

雅正香 麻淑清 篠藤江理 久美英  
泉子織 美子耀 右倖子 美雪二

澄東た	正艸も	竜東／卯春A大玉竹正う石竜岩白正樹大とも高安蓮和明
春総か	華玄く	春峰／月汀I阪松扇華る習泉沼鶯華原雲かく崎波紅平漠
	秀	
宇薄岩伊石石膏	後龜津新渡藤六橋山神飯松高石山佐近磯猿松育小本井嶋	
田田田藤橋坂木	藤井田谷子波本村保高丸橋崎藤蘿貝渡本木野田上	
川	江寺	与
		江祢久美英祢
春春春英知惠啓	知幸巖紀昌等紅炎佳幹愛雅正香麻淑清簾理久美英子	
華綠燈子子子子	子勸子泉子紀玉霞秀生子石泉子織美淑耀右伴子美雪二子	
	(60)	

こ京戸蓮千梵春艸調仙紅声長た湘竹八竜八蒼高調詢う彩竹艸詢書宮こ椿石  
だ橋出紅葉葉汀玄布台瑠香月か南美街泉街陽崎布扇玄扇翠智

吉吉吉遊村三松藤中中高須鈴猿佐櫻斎後古込小小工木岸河龜小岡大遠内  
野田田佐田宅重井澤川橋田木浦渡藤田藤矢山峰林藤村田岡井野部崎石藤田  
野美羨  
彩祐紀紅笑白翠晴雅澄敏香香菊冬詠智桂良興加雅香順東星紫江照翠星拱皓  
祥子子雅華楊景子子惠子舟楓枝華子舟子泉翠子子子蘭子子扇風詢芳園祥柔泉

佳作(60首)  
生竜大泉 入選(60首)  
生竜大泉 涩東千清竜五艸正木澄調小雲さ倉大華黎椿渡秀彩英A千艸や翠大華昌高大蘭如華誉春秀高こ昭千もこ大高艸さ  
和実葉月泉葉玄華曜春布丁溪つ吉阪祥明翠辺水峰I葉玄ま吟雲祥苑崎阪鼎月祥田汀明崎だ微葉くだ拙崎玄つ  
新浅川み廣安江 若吉湯大森森村松掘深野永長仲中中徳玉田竹田高閑鈴柴紫斎齊近高熊木北岸川金加小沖大浦梅宇今板五荒革新明  
菜田本和田田岡江堀沢瀬尾西島江田木中森口橋口木田雲藤藤藤武野元村本崎子藤野森部原野関倉十木井石  
由矩真禮紀龍陸珠律幸清萬蓉翠游豈乎萩惠彩弓み初秋多和煩絹て開谷桃欣萩優蘆理和喜代虹華梨佳桂孫知靜麗  
子理子江博子風子泉洗雅汀峰溪作子峯葉首子江麗良美月子え窓城涼苑子西子城方絵子代子祥泉麗子米功技江子

千八皓 春竜N高洞宮 大湘東大童調生玄英四 生鬼広大大英大 大泉明四青藤玄高前石英久青秀高石N書八春誠 大洞も葉生映 汀景H崎書城 阪南光雲泉布大象峰谷 大高島雲阪峰雲 阪会漢枝峰 象真橋習峰寶眞習H景街汀和 阪書く渋篠重佐 佐櫻坂酒酒後後小小小黒吳木君木吉北北菊神川河河片梶目小小小奥尾大大梅碓牛上岩岩岩犬伊伊石石生池安新谷田信々々田本井井藤林嶋暮柳 村島下瀬村又池田本合合野川賀野高澤川川八村山井丸原剗田崎上飼藤渡田崎駒田藤井惠 木木 美木

かな研究部成績表

小文研究部  
寺尾  
鳥  
手赤子

三

---

—

一  
顯  
綠